

---

# 異世界の人間

するめ315

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界の人間

### 【NZコード】

N9097Q

### 【作者名】

するめ315

### 【あらすじ】

朝起きたら、裸の少女が隣で眠っていた。この少女は私だけのものだ。

異世界の朝のバッシュュ視点。

(前書き)

思い立つて書きました。続き（？）です。バッシュ視点でみた朝の出来いとは。

この抱き枕あたかくて、抱き心地がいいな。肌触りも好みだ。贅沢をいうならもう少しボリュームといつか、肉つきといつか……その辺を増やしてほしい。

まあ、好みの量となるとなかなか微調整は難しいな。

しかし、昨夜寝るときに抱き枕なんてあつただろうか。執事あたりが用意してくれたものに、疲れていて気付くことができなかつたのであらうか。

「…………うん…………うん…………。」

ついでい。唸るな。まだ寝る時間なんだ。私の安眠を邪魔するな。

そこで、ふと思つた。普通の抱き枕は唸るだらうか。

ガバッ

暗殺者かもしれないと飛び起きた。

枕もとの剣を握りベッドの隣を見た。

ベッドには、肩より少し長めの黒い髪をもつたかわいらしい少女が裸で寝ていた。

なかなかのスタイルである。

華奢で思わず触りたくなるような肩のライン。顔に似合わないボリュームの胸。胸をより強調するような細い腰。丁度いい肉つきをした足。滑らかな象牙色の肌。

すべてが私好みでむしゃぶりつきたくなるような少女……いや、女  
だった。

私のベッドの中にいるところには、大臣や貴族からの貢物だらう  
か。

それとも、他国からの暗殺者か。

しかし、どれも違う気がする。大臣や貴族から命をうけてやつてしま  
っているなら、私を起こし誘惑しないのはおかしい。暗殺者に至つて  
はターゲットの隣で寝るわけがない。見たところ武器も持っていない  
ようだし、何より、私が人の気配で目覚めなかつたのが……。  
普段の私であれば眠りは浅く、人の気配に敏感だ。今まで起きなか  
つたことはない。

そして何より、この少女を抱いていたとき私はリラックスし、熟睡  
していた。

不可解な存在である。

それにして、視界的意味で刺激が強すぎると、集中できず、考えが  
まとまらない。

しばらく忙しく、女を抱いていなかつたせいだろうか。

それとも、この少女のせい。

バサ

シーツプラス上掛けを少女の身体にかけた。

視界的に遮ることもでき、深呼吸をし、落ち着いた。

とりあえずは、この不可解な存在を起こし、本人から情報をとるの  
が、一番手つとり早そうだ。

「おー、お前、起きる。おー、起きる。」

「……うへえ。お兄ちゃん。後5分、……。」

完全に寝ぼけてやがる。

「私は、お前の兄ではない。起きる。これ以上待たせるよいならたたき切る。」

「え！……。」

飛び起きた少女の瞳の色は黒。この大陸には珍しい色の持ち主だ。やはり、他国からの暗殺者なのだろうか。

「……やつと起きたか。」

少女は一いつ瞬をジッと見ている。何か企てている最中なのだろうか。

「……おはよー。まーす。つかぬことをお聞きしますが、男性の方ですね。」

その質問に开端を挫かれた。

「…………男以外の何に見えると…………。」

「ですよね。あーやかった。で、じーじーですか。」

この場所が分からないと。おかしい。無理矢理部屋に入れられたのか？

不信に思いながらも質問に答えてやった。

「…………こはセーラーの寝室だ。それより、私の質問に答える。答え次第では命はないと思えた。この部屋に、ましてベッドの中など

「どうやって入った。その格好を見る限り、大臣や貴族から私を誘惑するために送られてきたか。それとも、他国からの暗殺者か。」

「いくら考えても答えは見つからない。直接聞いた方が早いだろ？」  
何か尻尾を出すかもしない。

「命のために答えますが、この部屋にどうやって入ったかはわかりません。起にされたらここでした。この格好は、誘惑や気を緩ませるためにものではなく、ただの趣味です。私、寝るときは基本裸なんです。」

裸で寝る派なのか……大胆だな……。

そんな場違いなことを思いながらも事情聴取を続けていく。

「…………どうやって入ったかわからないだと。嘘を言つた。お前、どこから来た。」

「生まれも育ちも日本国の首都東京です。」

「…………ニッポン……知らない国名だ。どこにある国だ。」

「東の方にある小さな島国です。最近私が注目してる主な産業は漫画やアニメです。あと、中小企業である町工場の技術力は世界一だと思つてます。」

「アニメ？マンガ？それに、東にある島国…………。東には確かに島国があるが、ニッポンとかいう名ではなく、穂澄国ほずみこくという国だぞ。隣国のセレナーデ国が貿易をしているはず、確か……主な産業は医療だったと記憶しているが…………。」

「なんだかこいつの言つていることがおかしい。頭がいかれてるのだろうつか？」

「…………」のセーラ国は、何大陸にある国なんでしょうか…………。

「…………大陸の名も知らないのか……」これは世界で最も大きいマヌー大陸にある3カ国の一つだ。」

大陸の名も知らないという事実に不信感がますますつのる。

「…………あのう……私…………もしかしたら…………異世界ってやつからきたのかもしれないです…………。」

何を言われたのか一瞬わからなかつたし、反射的に返答していく。

「い……異世界だと…………。」

「はい。」

「そ……そんなの信じられるか。」

「でも、だつて……この大陸の名前も國の名前も、私の全く知らないものです……。」

「…………か…………還り方は…………。」

「わかるわけないじやないですか。起きたらここにいたんですよ。」

「だよな…………。」

「はい。」

「つまりお前は、ここがどこだかも、どうしてここにいるかもわからないと…………。」

「はい。そうなんです。」

「…………はあ……もういい。頭が痛くなる。」

大臣や貴族がよこした者でも、暗殺者でもなかつたのはある意味よかつたが、私が思つていたよりも事態は重そつだ。

かかえていた頭をあげ、少女を観察する。

ショックを受けているかと思えば、表情はなんだかキラキラと輝い

てこる。どうしたんだ?

「おー。……おー。」

「はい。」

「お前……不安ではないのか。」

「まあ……不安といえば不安ですけど、今はこの未知の体験を満喫し尽くしたいです。還る方法はおにおに考えます。」

「ほう……。」

思わず笑みがこぼれた。

こいつなかなか面白い。肝もすわつていいよつだし、何より先ほどから冷静さをかけていいない。

ホシイ。「ノノ少女ガ手元」ホシイ。

自分の欲望をはつきりと自覚した。

「お前、名はなんといつ。」

「……名を聞くなら自分から名のる。これほどこの世界でも常識だと想つてこましたが……。」

ツチ、生意気な奴だ。この私にそんなことをこつ奴は珍しい。

「……バッシュ・レオン・ハルベルト＝ゼーラだ。だいたい分かつているとは思うが、この国の王だ。年は24になる。」

「小町勇姫（じまちゆうひめ）16歳。女子高生やつてます。勇姫つて読んでください。」

「

もっと若いと思っていたが、16。なるほど、それなりつなずけるスタイルだ。

それより、やつをから思っていたが、この言葉には時々わからない単語が入る。

「……女子高生と言つのはなんだ。」

「高等教育を受けている女子のことを、私の国ではそつぱうのですよ。おじさんたちの注田の約です。」

……なぜ高等教育を受けている女子が、オヤジの注田の約になるのか理解できない。

ただ一つ言えることは

「……なんだか気持悪いな……。」

「仕方ありません。おじさんたちも注田のストレスがあるので

よ。」

「…………そうか。…………そろそろ話を戻してもいいか。」

「こいつを私の手元にからめとるための、話をしなくてはいけない。

「はい。どうぞ。」

「お前……こや、勇姫。この世界に興味があるといつてていたな。しばらくこの世界に滞在するつもりであろう。」

「はい。」

「ならばこじむとよこ。」

ずっととな、と心の中で付け加える。

「こじむとよこ、この部屋のことですか。」

「いや、この城のことだ。別にこの部屋でも構わないが……。まだ婚礼の儀をしてないしな。」

「最後の方聞き取れませんでした。なんですか。」

「なんでもない。関係のないことだ。」

本音が漏れていたようだ。あぶない、あぶない。

「そうですか……。でも、いいのですか。私を住ませても。」

むしろ住んでもらわなければ困る。外に出したら最後、どこかにいつてしまいそうだからな。

部屋は……隣の王妃の間が空いているな。隠し通路もあるし、おおおいつの部屋になるものだ。まあいいだろ。

「構わん。部屋は余っている。私の隣の部屋を用意させよ。それに教師もつけてやる。」

「教師？」

「この国の読み書きや常識を知つておいた方がよいであろう。話は通じるようだから問題ないな。」

最低限の王妃としての仕事ができないと困るしな。

「わー、ありがとうございます王様。」

變らじい笑顔でお礼を言われたが、物足りない。

「いや、せいぜい励めよ。それと私のことは王様ではなく、バッシュと呼んでくれ。それと敬語も無しだ。」

「はい。あ、間違えた。うん。本当にありがとうございますバッシュ。」

うむ、この方がしっくいくるな。

「こいつをからめ取るには、いろいろと下準備をしなければいけない

な。これから忙しくなる。

でもまあ、手始めに、私好みのドレスを着せるところからはじめる  
か。

(後書き)

また続くかも……。

ちなみに勇姫の胸のサイズは70のEカップです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9097q/>

---

異世界の人間

2011年2月19日19時35分発行